

【うどんおやじ】

冬の夕方から深夜にかけて、村ではいつからか、饅頭（うどん）の屋台が出るようになりました。

そうするといつからか、気味のわるい【うどんおやじ】が出没するようになったとのことです。

ぼくが【うどんおやじ】に逢いたくて、夜こっそり家を出ようとする、気づいた母親がぼくに、十円玉を三枚握らせてくれました。

饅頭一杯の値段、三十円です。

ぼくが、

「わしが、うどんくうわけじゃのうて、【うどんおやじ】をみただけじゃ」

というと、母親は、

「だから、金もってけと、いうんじゃ」

といました。

わけもわからずに、屋台の灯りが見える躑躅峠（つつじとうげ）まで行くと、うしろから声をかけられました。

これはまちがいなく【うどんおやじ】です。

「でたでた、【どんくさおやじ】」

というと、

「失礼な。私は【うどんおやじ】ですよ」

と行ってから、ぼくに近づいて、

「金ちゃん、賭けをしましょう」

「なぜじゃ」

「人生は賭けだからです」

「おぼけの、じんせいも、かけかのう」

「厭なことをいいますね」

「どんな、かけじゃ」

「私の髪の毛をこの鋏で切ってください。うまく切れたら、金ちゃんの勝ち、誤ったら私の勝ち」

「そんなこと、かんたんじゃ。かけは、わしのかちじゃ。して、かったら、なにももらえるんかいな」

「饅頭一杯」

「ええよ」

「では、勝負、勝負」

というわけでぼくは、鋏で【うどんおやじ】の長くて汚い髪を、ちょっぴんちょっぴん。

床屋になった気分、浮かれていたのがいけなかったのか。
それとも、暗いせいで、うっかり手元が狂ってしまったのか。
あるいは、左手に三十円を握りしめていたので、片手使いになっていたからなのか。

ぼくは【うどんおやじ】の片耳を、髪の毛といっしょに、ばっさり切り落としてしまったのです。

「こりゃいかん、すまんのう、すまんのう」

ぼくが平謝りをすると、【うどんおやじ】は、耳から血を吹き出しながら、

「やったやった。賭けは私の勝ちです」

と笑顔で大喜びです。

屋台のおじさんが作った、一杯の饅頭をすすりながら、【うどんおやじ】は、
「うめえうめえ、あったけえあったけえ」

と大声をあげました。

耳からの血が、饅頭の丼に、ぼたぼた落ちるのもかまわずに、感激のあまり涙ま
で流しています。

ぼくは（母親の言葉をおもいだしながら）屋台のおじさんに三十円を渡し、

「【うどんおやじ】はいつも、かけにかつのかのう」

そっときいてみると、

「へい、そうなんで。賭けには負けたことはありませんねえ。昨夜は村の若いもん
に、鼻を切り取られて、勝った勝ったと喜んどりました」

それで安心しました。

そういえば以前、懐爺に、きかされていたことがありました。

いくら切り取られても、【うどんおやじ】の耳や鼻は、すぐに再生するのです。

ぼくは【うどんおやじ】の、嬉しそうな顔をかいまみながら、

「よかったのう、よかったのう」

といい続けました。